お茶漬や

乃無太郎

お茶漬屋

　細工町、高知のネオン街の中心。その一角に「カサブランカ」というお茶漬け屋がある。店の広さ、十三坪強はあるだろうか、カウンター席が七席、テーブルが三個、老婆が独りで切り盛りしている。私は目的があって初めてこの店に立ち寄った。正確にいうと十年近く前にこの居酒屋に一度入った記憶がある。客は一人もいない。老婆が独りテーブルに腰を掛けてテレビを寂しそうにみている。私が店に入っていくと、その寂しそうな顔が、突如いかにも人懐っこく愛くるしい表情にかわって「いらっしゃい！」と一言いってカウンターの中に入っていった。相当の猫背である。私は取りあえずビールを注文し、老婆にも一杯すすめた。断るかと思ったが、嬉しそうにコップを差し出した。一杯注ぐと一気に飲み干した。もう一杯注いでやった。私はつまみ用にカウンターに並べられているキュウリ

の酢物と鯖の煮付けを注文した。鯖は煮付けが程よくきいて旨い。テレビはニュースが流れている。時計をみると午後七時過ぎである。店の外も客の流れが全然ない。「景気はいつになったら良うなるろうねえ」
「もう、昔のようなことはないでしょ。これから先も今のような状態じゃないですか。いつまでも右肩上がりの成長なんて考えられませんよ」
　私はこの女将を年寄りと思って馬鹿にしてはいけないと思った。世間の情勢を良く知っている。
「私もこの場所でもう三十数年になりますが、ほんとに昔は忙しかったですよ。県外のお客さんもよう来てくれたし、今でも出張で来て、たまに寄ってくれるお客さんがいますよ。以前はクラブでしたが、十五年前に今のお茶漬け屋に替えたのです。県外のお客さんに分かるようにクラブで使っていた看板をわざと残したんです」
「なる程、そういうことだったんですか……」

3

「なにか不釣り合いでしょ？」
「いや――、クラブの頃はおかあさん、相当人気があったでしょ？今でもその雰囲気が残っている」
「歳を考えて、お茶漬け屋に切り替えたけど、初めの三年位はいつ閉めようかと思っていましたよ」
　私が以前この店にきたことは当然覚えていないだろうが、心置きなく話す。私は独り、コップにビールを注ぎながら、この女将が今、高利貸しに手を出して二進も三進もいかなく、家賃も遅れているということをこの店の家主に聞いたことを思い出していた。
私がこの店に入ってきた目的は、このお茶漬け屋を売る意思があるかどうかを確認するためであった。
　ビールをもう一本注文したとき、私の職業を訊いてきたので不動産業者だと答えると、女将の顔が曇った。何かを嗅ぎ取ったのだろうか。私は当たり障りのない世間話に切り替え、今日は本題には触れないようにしようと心に決めた。

　高知は３球団、野球のキャンプを張っているが、とくに今年はＡ球団の新監督、Ｂ球団のドラフト一位の新人投手の超人気で高知への経済効果は計り知れないと新聞は報じている。その話題を出すと、この店にもＢ球団の連中が来るとのこと。この女将がクラブをやっていたころからの連中で、今では球団のフロントや幹部に皆、成っているらしい。「おっかあ、今年も来たぞ」といって、必ず土産を持参してくれる。かわいいものだといって女将の頬がほころぶ。
　私は２月２８日のＡ球団とＢ球団のオープン戦の前売り券を先日買いに行ったが、すでに売り切れていたことを話すと、近日中に招待券を店に持って来てくれるので二枚、私に回してくれるという。招待券が届いたら、連絡をするからと私の名刺を女将は催促した。
　それから、一週間経っても女将からは招待券が届いたという連絡がないので、仕事を終えて夕方、店に顔を出した。
「いや、今年はどういうことじゃお。忘れちゅうがじゃおか？……」
　といって、Ｂ球団が宿泊している新阪急ホテルに電話を掛けだし

た。私はそんなにしなくてもいいですと気を使うと、
「いやいや、云うたら必ず持ってきてくれるき」と、女将はホテルのフロント係りと話し始めた。名前は聞き取れなかったが、部長ははっきり聞き取れた。電話口でしばらく待っていたが、その部長は今、ホテル内には居ないようだ。女将はカサブランカに電話を下さいというメッセージを伝え電話を切った。
「必ず、電話が掛かってくると思います」
　と、自信有り気に言った。私は期待して、その店に９時過ぎまで居たが、結局部長からは電話はなかった。
女将は私にとても恐縮して、
「すみませんねぇ、連絡があれば必ずお電話しますき」
　と、勘定の際に言った。

6

　次の日の昼頃、カサブランカの店の前を通ると、借金の取り立てやらしき者が三人屯していた。
　それから四、五日くらい経った頃、カサブランカの女将の消息が分からなくなったと、店の家主から私に連絡があった。
　その翌日、カサブランカの女将から電話が掛かってきた。私を信用して掛けてきた様子であった。
　女将は現在、関西のとある親戚に身を潜＜お＞いている。その連絡先は言えないが、その代わりに高知市内に住んでいる弟の連絡先を教えてくれた。
　店を売るといっても昔なら権利を売るといったが、今では内装什器備品を売るということである。以前ならカサブランカ位の小さな店でも三百万円では売れたが、今のご時世では家賃の滞納分の百十万円が関の山。これ以下であれ、これ以上であれ、責任もって対処するから心配しないようにと言って、私は電話を切った。